

エンゲルスの『起源』の序文における二三の問題： 『政治學序説』補遺

今中，次麿
九州大学：教授

<https://doi.org/10.15017/1261>

出版情報：法政研究. 19 (1), pp.1-19, 1951-06-30. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



エンゲルスの『起源』の序文における二三の問題

(『政治學序説』補遺)

今 中 次 磨

一 はしがき

わたくしは『政治學序説』を書くとき、むしろエンゲルスの『反デューリング論』を重視し、『家族・私有財産および國家の起源』は、モルガンの焼直しであるので、あまり重要視しなかつた。したがつて、その序文は、まだ讀んでいなかつたのである。ところが、この序文の中に、重要な二つの問題が取扱われていることを、後から知つたので、ここにそれについて書いて見ようと思うのである。

それは最近山内正樹君から、この序文に對するエム・ミーチンの批判があるということを教えてもらい、同君の翻譯になる原稿を見せてもらつたのが動機である。

論 說
ミーチンの論文は、一九四九年一月五日、レーニングラードのソヴェト同盟、科學アカデミー祖國科學史部會における報告の速記であつて、「マルクス・レーニン哲學思想の發展における、スターリンの著作『辨證法的唯物論と史

論 說
『唯物論』の役割と意義」と題するものであり、『ポリシエヴィーク誌』（一九四九年一月）に掲載せられたものであるということである。

この論文の中で取扱われている二つの問題というのは、『起源』の一八八四年初版の序文において述べられている、歴史の決定的要因としての家族の問題であつて、同一八九一年四版の序文において述べられているバツハオーフエンに對する批判が、それに附隨して述べられている。

この第四版序文で、エンゲルスが、バツハオーフエンについて述べているということも、今まで、わたくしは、これを知らなかつたので、『政治學序説』でわたくしが、それに言及したことについても、ここに更に補筆されなければならぬと考えている。

なお、この論文の末尾に、もう一つつけ加えて置きたいことは、やはり最近のソ同盟文献の一つであつて、それはエム・カムマリという筆者の『新しい段階における民族理論と解放闘争』（社會經濟研究會一九五一年）と題する論文の中で述べられている民族理論のことである。

二 生産手段の生産と人類の生産

この問題についての、ミーチンの批判の對象となつている、エンゲルスの文章は、次の點である。

「唯物論的見解によれば、歴史における、最後の決定的要因は、直接的なる生活の生産および再生産である。しかし、これはそれ自体また二種類である。一方では生産手段の生産、すなわち食糧・衣料・住宅の生産、および、それに必要な工具の生産であり、他方では、人類の増殖としての、人類の生産である。

「その下において、一定の歴史的時期や、一定の土地の人類が、生活するための社會諸制度は、二種の生産様式、

すなわち、一方では労働の發展段階、そして他方では、家族の發展段階によつて、規定せられるだろう。

「労働が未發達であり、その労働による生産物の量と、そしてまた社會の富が、制限されていなければいほど、それだけ強く、血縁的紐帶によつて、社會秩序は支配せられるように見える。この社會秩序の下においては、血縁的紐帶によつて確立されている、社會の文化組織の中に、おのずから労働の生産性が、しだいに發展してくる。それに伴つて、財産私有制と交易、富の差等、他人の労働力の利用價値、および、それと同時に、階級對立のための基盤の發展が見られ、新しい状態に古い社會組織を適應せしめるための、數世代に亘る努力にもかかわらず、結局、兩者の不一致から、變革の完成へと導くところの、新しい社會的要素が發展する。

「古い血縁的紐帶の上に立つ社會は、新しく發展した階級社會と衝突して、紛碎され、その代りに一つの新しい社會が、國家そのものとして出現する。國家の下においては、もはや血縁的紐帶ではなく、地縁的紐帶が、その統一の單位である。この新しい社會の下においては、全く財産制度によつて支配される家族制度と、ここに始まる階級對立、ならびに階級闘争が、ほしのままに發展するところの、すべてのこれまでの、記録的歴史時代が、ここに成立する。」(S. VIII. Intern. Bibl.)

これに對して、ミーチンの批判は、次の通りに述べられている。

「この命題において、エンゲルスは、史的唯物論に關する、自分自身の見解から離れ、社會生活における、物質的富の生産様式の決定的意義に關する、マルクスの廣く知られている命題から離れて、社會發展における、決定的要因をなすものは、二つの原理、すなわち社會的生產と、家族であると主張している。エンゲルスのこの命題は、明らかに誤つてゐる。」(山内・原稿三八枚目)

説 論

「マルクスは、モルガンの著書『古代社會』への概要において、家族が社會生活の決定的原因ではないこと、家族自体が、所與の社會において、支配的な社會体制の産物であることに、注意を向けている。」（同・三九枚目）
このミーチンのエンゲルスに對する批判は當つていゝであらうか。

わたくしは、次のような理由によつて、否と答へたい。

衣食住とくに食と、性とは、生物にとつて最も基本的な要求であつて、とくに人類にとつては、最も原始的な、生活上の規定であることは明白である。とくに食と性とは、決して互に相補うものではなく、ほんらい全く異なる生活内容をなしている。その場合に、原始人類社會においては、食生活の問題が極めて輕微であるのに反して、性が絶對的な問題となつてゐる。そのような原始社會においては、食生活は殆ど社會を規定する力をもたないのに反して、性生活は却つて社會制度の基本的な規定をなさねばならない。それは同時に、「生産手段の生産」や、そのために必要な「生産工具の生産」が、エンゲルスのいうように、殆ど社會生活を規定する意味をもたず、したがつて、この原始的社會段階においては、生産關係が、いまだ「經濟關係」とよび得るような状態をもたず、もつばら、人類それ自体を生産するための性生活のみが、この社會を支配する生産力であつて、この生産力の内容をなすところの生産手段は、人間それ自体の肉体にほかならない。かように、生産手段の生産が不必要な社會には、經濟的な意味においての「労働」というものはあり得ない。そこには、したがつて「労働による生産物の量」や、まして「社會の富」は、いまだ全く社會の問題とせられる必要がない。

もとより、このような原始社會でも史的唯物論の原理は、一貫して認められなければならないが、この原始的社會段階で、歴史的發展を決定する要因としての、「直接的なる生産および再生産」は、人類それ自体の生産すなわち人

類増殖としての、家族とその血縁的關係が、生産力そのものの内容をなしているといわなければならぬ。

故に、エンゲルスが、社會的生產様式の二種類として提示している、「労働」と「家族」は、決して併行的なものと考えられているのではあるまい。だから彼は、労働の未だ發達していない原始社會では、ただ「血縁的紐帶によつて、社會秩序が支配せられるように見える」と云つていたのであり、この「血縁的分化組織の中に、おのずから労働の生産性が、しだいに發展してくる」と説いているのである。

これによつて、エンゲルスがこの場合には、「労働」の生産力を、最終的な、歴史發展の決定的原因として、否定しているのではないことが明らかであり、むしろ、ここでは、初めて「労働」の生産様式が、しだいに經濟關係へ發展してゆく、始源的過程を明らかにしようとしているのではないか。

ミーチンは、更にマルクスのモルガン『古代社會』への概要を引用して、エンゲルスがマルクスから離れて誤を冒しているというのであるが、このミーチンのエンゲルスに對する非難も、當つているとは思えない。

何となれば、エンゲルスが、第一版序文で書いているように、この『起源』は、マルクスの『概要』の未定稿を完成したものであつて、兩者は決して別々のものではないからである。

「本書は、一つの遺言(マルクスの)の執行とも云うべきものである。」とエンゲルスは、そこで書いている。「本書は、ただわが故友(マルクス)にとつて、これを成就することが許されなかつたものに對して、僅かの補充をなすに過ぎないものである。しかし彼(マルクス)のモルガンからの抄録の中には、批判的な脚註があつたので、わたくしは、それをここでできるだけ再録した。」(a. a. O. S. III.)

エンゲルスの『起源』はたしかにその通りの内容をもつており、マルクスが遺稿において述べたことを、とくにエ

論 說

ンゲルスが歪曲して展開するということは、全く考えられないことである。しかもマルクスは、上述の通り、「家族」について、とくに注意を喚起しているのであつて、エンゲルスが、この明瞭なマルクスの命題を無視する筈もあり得ないではないか。

要するに、マルクスが「家族」について述べていることは、ここでエンゲルスが述べているところの、「労働の未発達」な始源的段階のことではないのであつて、それはもつと一般的な、方法的な注意であり、むしろモルガンならびに、それと同じ立場の方法への批判として、述べられたものであることは明瞭である。

更にミーチンのこの論文は、スターリンの『辨證法的唯物論と史的唯物論』への頌詞として述べられているのであるが、スターリンのこの論文では、ただ「人口問題」と「地理的環境」を決定的原因とすることの不當が説かれているだけで、「家族」に關することは、どこにも説かれていない。ミーチンの文章では、「スターリンが指摘した」とあるが、どこにも指摘されていない。

ここにおいて、わたくしは、次の理由で、ミーチンのエンゲルス批判を、不當と認める。

(一) 人類の原始生活において、記録的な歴史が開始する以前の、いわゆる史前時代の人類社會に適用される、マルクス・レーニンの史的唯物論としては、エンゲルスの理論が正しいこと。何となれば、生産手段の生産およびそれに必要な工具の生産は、この段階においては、決して、その社會の支配的な要素となつていないからである。したがつて、この未開社會において成立している生産力は、「人類の生産」が、むしろ基礎となり、その結果成立する生産關係も、したがつて、經濟關係ではなくて、血縁關係や兩性關係が、支配的なものとなつてゐる。

(二) しかしかような社會關係は、しだいに變化する。性生活と血縁關係の中に成立した、血族婚姻禁忌の經驗的意識の發展による、一人の父を中心とする氏族制度の出現とともに、はじめて生産手段の生産と、工具の生産および再

生産の必要が起る。ここではじめて、「生理的・性欲的生産」が、「物的生産」に發展し、それと同時に、性および血縁の紐帯が、經濟の紐帯へ、換言すれば、經濟制度へ發展するに至る。ここから記録的歴史時代が始まる。

(三) この問題はなお史的唯物論において提出せられている、歴史的發展過程の五つの基本的型式に關連をもつことになる。すなわち、この五型式の第一の型式である、いわゆる「原始共同体」の問題である。この「原始共同体」は、母系制社會のみを意味するのか、それとも族父制社會の原初期段階をも包含するのであるか。また、石器から弓矢へ、それから更に鐵器への移行の過程において、どこまでが、原始共同体であるのか。かような財産制度や生産手段の上から見ると、「人類の生産」が支配する段階は、史的唯物論では、いまだ極めて不正確でしかない。しかしミーチンの努力は、それを正確にすることの反對であるように考えられる。

三 スターリンの「史的唯物論」

ここにおいて、われわれは、更にマルキシズムにおける歴史發展に關する決定的原因の理論を、考察して見る必要に迫られる。この問題は、辨證法的唯物論の具体的適用としての、史的唯物論の問題に屬しているが、それについては、スターリンの『辨證法的唯物論と史的唯物論』が参照されねばならない。

この論文において述べられている、スターリンの史的唯物論は、次のように要約することができる。

(一) まず、それは、人類がその生存に必要な生活資料を獲得する方法であつて、これを物質的財貨の生産方法と名づけている。食糧・衣料・履物・住居・燃料・生産用具が必要であるが、そのほかに、一定の生産上の經驗や、仕事に對する熟練と、更にこれらのすべてを所有する人間そのものが、まず必要であつて、これらが相寄つて、社會の生産力を構成する。

論 說

しかし、生産方法は、そのほかに、生産過程における人と人との關係を必要とする。これがすなわち、生産關係である。故に生産は、いかなる場合においても、社會的生產である。

(一) 生産の過程には、常に變化と發展があることである。これは生産方法の變化や發展にとどまらず、社會制度や思想へ反映する。すなわち、歴史發展の決定的原因は、生産方法のうちに、すなわち、社會の經濟機構のうちに求められるのであつて、それはつまり、生産力と生産關係との、發展の法則にもとづいていふことである。

(二) かような變化と發展は、何よりもまず、生産用具の變化と發展をもつて、常に始まる。故に、社會の生産力の變化が、最も基本的な原因となる。生産力の變化は、當然、生産關係を變化せしめる。しかし生産關係の變化が、生産力の變化に相應しない場合には、生産關係が生産力の變化を制約することになる。人間がどんな生産用具を用いて生産するかは、生産力の状態によつて決定される。しかし生産關係の状態は、それが生産手段（土地・森林・水利・地下埋藏物・原料・生産用具・生産用建物・交通機關など）を所有し、また支配するかを決定する。

(四) 古代から現代に至る生産力の發展は、粗雑な石器から弓矢への移行と、それに關連する狩獵生活から原始的牧畜、生産生活への移行。石器から金屬製器具への移行と、それに關連する農耕生活への移行。材料加工のための金屬製器具の一層の改良、鍛冶用ファイゴへの移行、陶器生産への移行と、これに適應した手工業の發達、手工業の農業からの分離、獨立した手工業の發達と、それにつぐマヌファクチュア（工場制手工業）の發達。手工業生産用具から機械への移行と、手工業・工場制手工業生産から機械による工業への移行。機械制度への移行の現代的大規模機械化工業の出現。もとより生産用具の發達と改良は、生産に關與している人々の變化、その經驗上の發達と、熟練ならびに技術的發達と關連していることはいうまでもない。

(五) 生産力の歴史的な變化と發展に相應して、生産關係（經濟關係）も變化した。それは次の五種の基本型とせら

れる。原始共同体・奴隸制・封建制・資本主義・社會主義、これである。

(一六) 新しい生産力と、これに適應する生産關係は、人間の意思とは全く無關係に、舊制度の消滅以前に、舊制度の内部に發生してくる。

このスターリンの理論のなかで、「人間そのものが、まず必要である。」ということは、人類の歴史が、まず「人類の生産」から始まらなければならないことを示している。そして、人類が最初から群をなして生活しているにもかかわらず、食生活と自然力からの身体の防衛は、いまだ動物がそうであるように、生産要具というほどのものも、また特別の武器も持つことなしに生活している未開の段階があることは確かなことであり、そこには、生活の社會的形式が必要であることは云うまでもないとしても、自然に存在する石塊や棍棒や、人間の身体と活動そのものいかに、社會的形式を支配するほどの生産手段というものが、あり得る筈はないのであるから、未開の社會段階では、むしろ「人間が人間自身を生産する——種の増殖行爲」が、その社會の基本的生産力として、その社會關係を決定していると見ることは、必要であるだろう。

のみならず、かように、スターリンの史的唯物論においては、このような原始的社會段階での、社會的變化と發展について、特別に明らかにせられるところはない。史的唯物論においては、歴史的發展の決定的原因は、生産力と生産關係の矛盾にほかならないのであるが、原始母系制社會において、果して、かような生産力と生産關係の矛盾は、どこに存在していたのであろうか。

論 說

スターリンは、原始共同体について、——

「石器、またその後に出現した弓矢をもつてしては、人間はひとりひとりの力で、自然力や猛獸と戦うことは、全

く不可能であつた。もしも人間が餓死したり、猛獸や近隣の部落の犠牲となることを欲しないならば、森林で果實をあつめ、水中の魚をとり、ある種の棲家をつくるために、人間は、どうしても共同して働かねばならなかつた。共同労働は、生産手段の共有制、同じように生産物の共有制をもたらした。猛獸に對する防護手段にも併用されるような、或る種の生産用具の個人的所有ということを考慮に入れないならば、ここでは、まだ生産手段の私有という觀念は存在しなかつた。ここでは、搾取ということではなく、階級もなかつた。」（眞理社・全集版・六七四―五頁）

と説明しているが、この原始共同体のなかで、共同体を解体に導き、財産の私有を作り出すために、どうして生産力の變化が起つてきたのであろうか。

スターリンは、この次に來る段階が、奴隸制社會であるとしており、それに間違ひはないが、しからは、いかなる原因が、この共同体の奴隸制への移行を促したのであろうか。

生産力の變化のためには、何よりもまず「生産要具の變化と發展」が必要であるが、「經濟關係」の存在しない、この未開社會では、經濟的な意味での生産力と生産關係の矛盾は、いまだ發生していない。そこには社會的停滯がなければならぬ。何がこの停滯を破砕して、生産要具の革命をもたらしたか。

風土や天變地異や人口變動は、すでにこれを決定する因子ではないとせられている。工具の改良は、生産力と生産關係の矛盾の反映でなければならぬ。しからは、この未開なる共同体のどこに、發展の力がひろんでいたか。それは、「人類生産」上の矛盾でなくてはならない。血族婚姻が人類の衰頹である限り、その合理的な解決は、一人の父を確立することではかないということではないか。

四 パッハオーフェンの神話

ミーチンの、エンゲルスに對する第二の批判は、エンゲルスが『起源』の一八九一年の第四版の序文で、バツハオーフエンの『母權論』を高く評價していることについての非難である。すなわちミーチンは、次の通り述べている。

「ブルジョアの觀念論的科學の代表者『母權』の著者バツハオーフエンを批判しつつ、エンゲルスが、次のように書いていることに、注意しなければならない。『したがつてバツハオーフエンによれば、男女相互の社會的地位の歴史的變更をもたらしたものは、人間の實際上の生活諸條件の發展ではなく、同じ人間の頭腦における、生活諸條件の宗教的反映であつた。』われわれは、エンゲルスがここで、男女の相互の社會的地位上の變化が、人間生活の現實的條件の變化の結果起る、換言すれば、家族の形態は、人間の物質的生活條件の變化とともに變化するという正しい設論から出發している。」（山内・三八枚目）

恐らくミーチンは、ここでもう一度エンゲルスを非難しようとしたのであるが、この引用句を見れば明白であるように、却つてエンゲルスの正しさを明らかにしただけで、少しも非難にはなつていない。

エンゲルスが、ここにバツハオーフエンを高く評價したことは、その歴史的方法の正しさではなくて、彼の『母權論』が、「神秘的見解」であつたとは云え、「一八六一年においては、一つの完全な革命を意味し、」モルガンの學說に對する、基礎工作をなしたとげたという點にあつた。

恰もバツハオーフエンの著書と、同じ年に現われた、ヘンリー・サムナー・メインの『古代法論』を對比して見るならば、バツハオーフエンが、いかに革命をなしたとげたかは、極めて明瞭であつて、エンゲルスは、これを正しく價値づけたにすぎない。

これでわたくしは、もはやミーチンを追及する必要がなくなつた。そこで更に、わたくしは自分自身の立場に還

つて、ハッハオーフェンを検討して見なければならぬ。
最初に明らかにしたように、『政治學序説』では、わたくしは、まだ、エンゲルスの『起源』の序文を読んでいなかつたので、いまこれを読んで、更に次のことを付け加えて置かねばならない。

エンゲルスの、この第四版の序文には、ハッハオーフェンが、ギリシアにおける神話をあげて、「娼婦制」(H. J. Farismus)から「單婚制」(Monogamie)へ、そして「母權」(Mutterrecht)から「父權」(Vaterrecht)への移行の理由を、よく説明していることが、述べられている。

それは次の通りである。

クリテムネストラ (Klytämnestra) は、その愛人エギストス (Aegisthos) のために、トロヤの戦争から歸つてきた自分の夫、アガメムノン (Agamemnon) を殺した。しかるに、アガメムノンの息子オレステス (Orestes) は、父の復讐のために、母エギストスを殺した。母權制の守護神エリンニエン (Erinyen) は、オレステスを訴追して、母殺しは最悪の罪であるから、贖う方法のない犯罪だと主張した。しかるにオレステスに神託を與えて、この母殺しをなさしめたアポロの神 (Apollo) は、裁判官として招請されたアテネの神 (Athena) とともに、オレステスの無罪を主張した。

これらの神は、父權制の神として現われている。

アテネの神は、まず兩當事者の主張を聞いた。オレステスは主張する。クリテムネストラには、二重の非違がある。クリテムネストラにとつては夫であり、オレステス自身にとつては父である、アガメムノンを殺したからであると主張した。それにもかかわらず、エリンニエンは、何故オレステスを告訴したかというに、それは、決してより罪

の重いものが母ではないからである。何となれば、彼女の殺した夫と彼女との間には、夫婦というだけで、何の血縁もないからであると主張した。

エリンニエンは、かように、たとい血縁者ではなくても、妻の夫に對する殺人は、當然、有罪であるという原則を、認めていないのである。エリンニエンの役割は、ただ血縁者たる殺人を訴追することに置かれている。何となれば、母權制によれば、母殺しは、最も重大な犯罪だからである。

そこでアポロの神が、オレステスのために、守護者として現われる。アテネの神は、アテネの陪審官たちである、アレオパガスの神々 (Areopagiten) をして、この裁判を裁決せしめる。裁決は半分ずつに分裂する。そこで、裁判長アテネの神が、裁斷を下して、オレステスの無罪を宣告する。

ここではじめて、父權が母權に打克つこととなる。エリンニエン自身のいわゆる「若き種族の神々が、エリンニエンに打克つたことになる。そこでこの新しい神々によつて擔當される、新しい地位の相談が始められる。」(S. VIII) これによつて見るに、ここでは、いまだ父權發生の理由は、少しも明らかにせられていない。ここには、ただ母權が父權へ移行した經過が説明されているだけである。

しかし、エンゲルスは、『起源』の第二章(家族)の第三節(對偶家族)の中で、血族婚姻の禁忌が、この移行の原因であつたことに觸れている。

「かように、ますます多く血縁者を婚姻紐帶から除外することのうちにも、依然として自然淘汰が行われている。モルガンの言葉を用いれば、『血縁にあらざる氏族間の婚姻は、肉体的にも、精神的にも、より強壯なる人種を作り出した。進歩して行く二種族が混和し、新しき頭蓋と腦髓とは、自然に、兩者の能力を包括するまでに、擴大された。』かくて氏族制度を有する種族は、必然的に後れた種族を支配し、またはその模範によつて、それを引上げた。」(S.

説論

「原始歴史における家族の發達は、それ故に、原始的には、全種族の内部で、包擁的に行われていたところの、兩性間の婚約的共同体の範圍が、ますます縮小されることにある。最初には近縁の、次には、ますます血縁の遠い親族を、そして最後には、單なる姻族すらをも、絶えず婚姻から除外することによつて、遂に如何なる種類の團婚制度も實際上不可能となり、そして最後には、一つの——すなわち、その解消とともに、婚姻が一般的に解消するところの原子 (Molekül) たる、一時的で、しかも緩やかに結合された對偶婚が残る。すでにこのことからして、いかに今日のコトベの意味における、個人的兩性愛なるものが、單婚制の成立と、いかに無關係なものであつたかが、示される。このことは、更にこの段階に立つ、すべての民族 (Völk) において、一層よく證明されている。」(S. 31.)

すなわち、血族婚姻が忌避されたという事實が、原始婚姻制度發展の原因であつたと、モルガンも、エンゲルスも、見ているのであるが、『政治學序説』(一四七頁)でわたくしが指摘したように、すでにバツハオーフェンが、別の個所で、そのことを明らかに説いているのである。しかも不思議なことに、同書(一四九頁)でわたくしが述べているように、バツハオーフェンが、母權から父權への移行を證明するために引用した、セクロプスからテシウスにおけるアテネの史實を無視して、モルガンやエンゲルスは、これを兩性生活の角度から論じないで、それが「財産の所有と相續」の成立に原因していると説くのである。

『政治學序説』には、エンゲルスについての引用が抜けていたから、念のために、ここにそれを追加しておこう。これはアテネの氏族の説明である。

「母權制は父權制に移つており、それとともに勃興しつつあつた私有財産が、その第一の破口を、氏族制度に與えた。第二の破口は、第一の破口そのものの、自然的結果であつた。すなわち、父權への移行以後、富める女相續人の

財産は、彼女の結婚によつて、彼女の夫へ、したがつてまた、他氏族へ歸屬すべき筈であつたから、すべての氏族權の原則は破砕せられ、氏族財産を保有するために、娘の氏族内における婚姻を許さざるを得ないのみならず、命令せられなければならなくなつた。」(Ursprung, S. 93.)

これによつて見ると、エンゲルスにおいては、血族婚姻の忌避ということと、財産所有および相続ということとが、どういふ關係において、母權から父權への移行へ關係しているのか、明らかでない。同じ書物の中で、二つの異つた説明が、何の連絡もなしに、なされているのである。

この二つの理論を合理的につなぎ合すとすれば、財産の所有と相続の成立が、母權の父權への移行を促す原因であつたということになるが、しからば、財産所有と相続という現象は、何が原因で發生したのであるうか、明瞭でない。しかも、上の説明の中には、「富める女相続人」というコトバが見える。母系制社會にも、すでに財の蓄積が存在していたということになる。それは事實にも反する。理論の未成熟であろう。このことは『政治學序説』で、モルガンに對する批判として、述べたところであつた。

五 階級と民族理論

スターリンの民族論をめぐる、最近における、ソ同盟の民族論争のうちの一つとして、わたくしは、最近、竹原良文助教から、エム・カムマリという筆者の『新しい段階における民族理論と解放闘争』と題する論文を教示された。

この論文においては、「民族」と「國民」とが區別され、民族は、民族統一運動や、民族自決運動における、近代的なものとして、取扱われている點で、レーニン・スターリンの民族論と同一であるが、そのほかに、「國民」とい

うものが認められていて、それは、古代からすでにひきつずき、現代に至るまで、階級分裂を抱合するところの、その統一意識の觀念として、提出せられている。

このカムマリの「國民」なるものは、つまり、わたくしが『政治學序説』で述べている「民族」に該當するものであつて、それと同一の内容をもつものである。但し原語が示されていないので、ソ同盟語では、それが何とよばれているか明らかでないが、竹原君の説では、ナロードニキであろうということである。

このカムマリの説によれば、原始種族社會が解体して、數個の異種族を統一する綜合的社會が成立したときに、この「國民」の成立が見られるのであつて、モルガンの nation と同一意味のものである。カムマリは、この國民社會の成立が、同時に階級社會の成立であるとするのである。わたくしの立場からは、かような見解が、ソ同盟に現われたことは、まことに興味あることである。

しかし、カムマリのように、「國民」と「民族」とを、かように二つに分けて、使いわけをするということは、いろいろの點で、不都合が起るのではないかと思う。

なるほど、從來、國家の國民と「民族」とは、必ずしも同一ではなかつた。それが同一でないところに、「民族問題」の源泉もひそんでいたのである。

しかし、ここでカムマリの使用している「國民」の概念は、必ずしも、「國家の國民」と同一のものではないようである。何となれば、統一意識の社會的主体と見られているからである。もしも、國家の國民が、統一意識の社會的主体として存在しているとすれば、それはすでに一つの「民族」にほかならないのであるが、現實の國家は、多くの場合、異なる統一意識をもつ、數個の異民族をもつて構成せられる。ここに民族問題があり、また「國民」と「民族」との相違があるのである。

故に、わたくしは、階級を抱含する統一意識として、敢えて「民族」をあげ、「國民」をあげなかつた。またそれは、「國家」でもないのである。國家は、意識の統一体としての社會的主体が、まず存在して、はじめてその上に存続しうるのである。國家の機構が先にあつて、しかる後、國民の社會的統一意識があるのではない。反對に、社會的統一意識が成立して、はじめて國家が成立するのである。そういう社會的統一意識の主体が、武力や經濟力や、その他のいろいろの支配關係のために、他の異なる社會的統一意識主体と結合して、一つの國家機構を作り、一つの協力の下に共存する場合が、しばしば見出される。ここに民族に對する民族の支配があり、民族問題の源泉が存在しているのである。

それは、決して階級支配ではないのであつて、階級は、各々の民族の中で成立しているのである。例えば、蒙古人や朝鮮人は、それぞれ一つの民族であるが、階級構造としては、決して一つではない。しかも中國の國家生活の下で、蒙古人の階級構造は、漢・滿・回・藏のそれとは、異つた單位をなしているであろう。日本支配下の朝鮮を見ても、朝鮮には、朝鮮固有の階級構造が見られる。それは日鮮兩國の、極めて古い交渉の間にさへ、決して融合されないで、古代史の最初から、現代史に至るまで、互に各々特色のある階級構造をもちつづけてきたのである。

したがつて、それぞれの民族は、それぞれ自身自身の階級構造を内包しつつ、同じように、それ自身の階級構造をもつ他の民族に對立して、存在しているのである。したがつて、民族は、國家それ自体ではないし、必ずしも亦、國民それ自体でもない。それと同時に、階級もまた、固有的には、國家において成立するのではなく、民族の中において、成立しているのである。異つた數個の民族が、一つの國家を構成する場合においても、その國家の階級構造は、一つではないのであつて、民族的對立に相應して、異つた構造を保存しているのである。ソ同盟の國家構造は、最も適切に、その實例を示しているであろう。その他ユーゴスラヴィア・チェッコスロヴァキア・英連邦・中國な

論 說

論 説

ど、民族的對立の明瞭な國家では、いかに階級が民族的主体の中で、異なる構造をもつか、よくうかがわれるであろう。かように、階級は、民族に内包されるものであつて、國家に固有されるものではない。したがつて、民族の代りに、國民という概念を使用することは、正しくないのである。

更に、國民と民族の使い分けが困るという理由は、近代の民族が、本質的に、古代以來の國民とどう違うかということである。カムマリは、その點について、何の説明もしていない。

マルキシズム、とくに、レーニン・スターリンの民族理論においては、民族が、近代資本主義の産物とせられてゐる。わたくしは、それを單に、民族の近代的形態にすぎないと考えるのであるが、それが何れであるにせよ、もしも國民と民族とを區別するならば、近代的な概念でないところの、この「國民」とは何であるか、その本質を説明する必要が起る。そしてこの説明は、上述するように、「國民」を國家の國民と同一視するのでは、満足せられないとすると、「國民」なるものが、ますますわからないものになるのである。

一つの國家構造の中で、われわれは、しばしば、互に社會の歴史的發展段階の相相る、數個の民族が對立しているのを見ることがある。この場合に、國家の國民としては、それが一つであつても、その中には、異なる民族の存在することを知ることができよう。それと同時に、これらの異つた民族は、一つの國民でありながら、その中の各民族は、それぞれ異つた經濟關係を有し、生産關係の上で、異つた單位を構成していることが、見られるであらう。ソ同盟や、中國や、ユーゴスラヴィアや、英連邦などは、その好例なのである。

それは決して社會的に異つてゐるだけでなしに、永い歴史的過程において、各民族は、經濟的に、異なる發展をなしてきたのである。一つの國家の國民の中に、かような異質的要素が含まれるために、民族問題が発生するのである。

階級闘争も亦、この線に相應して、發生しているのである。

そういう意味において、われわれは、民族と階級を考えている。したがつて、カムマリの「國民」の概念が、甚だ不正確であると云わざるを得ないのであつて、國民は、民族に改められ、近代の資本主義的民族は、民族の近代的一様相にすぎないことを、認める必要があるのである。

〔追記〕

永住道雄譯・ヴェーバーライハルト『前資本主義社會經濟史』によると、ソ同盟において、上述のエンゲルスの『起源』の序文における「人間の生産」が、相當以前から問題とされてきていたようである。しかしエンゲルスの本意が、歴史の記述的段階において、「家族」を基本的動因とすることに存しなかつたことは明白であるとともに、記述的歴史以前においては、エンゲルス説が、あくまで正しいことは明白であつて、これを問題とする方がむしろ誤謬であると云わねばならない。